

T A O G G E N

発行人◎高田かつ子 ☎048-881-9111〒336 浦和市南浦和3-19-2-303 編集人◎安藤哲朗
事務局◎下山昌孝方 ☎044-522-4185〒211 川崎市幸区小倉1-1, 1-514

穂高紀行

古田 武彦

序

私の愛読書の一つに『去来抄』がある。芭蕉の弟子、去来の著作だ。朝日カルチャーの講義などでも、時にふれていた。

ところが、この本の冒頭にあげられた芭蕉の一句、これが全くピンと来なかった。わたしには理解不能だったのである。それが今回、解けた。少なくとも、わたしには、すばらしい芭蕉の一句、そのように了解できたのである。

蓬菜に聞ばや(きかばや)いせの初日より 芭蕉

江戸の深川から、京都の去来のところへ手紙がきた。右の一句について、去来の感想を求めてきたのである。去来は答えた。「都とか古郷の便りではなく、伊勢とある。これは元日の儀式が今様(現代風)でないのを見て、先生は神代のことを思い出された。その便りを聞きたい、と道祖神の招きを感じ、旅に出たい、と思っておられるのでしょうか。」と。芭蕉はこの返信を喜んだ。「お前の理解の通りだ。今日、神の『かうがう敷あたり』を思い出し、慈鎮和尚の詞にたよって、『初』の一字を用

いただけのこと。『清浄のうるはし、神祇のかうがうしきあたり』を、蓬菜に対して結んだだけのことである。



有明神社参観中の古田氏

る蓬菜山」なるものの存在を始めて知ったのである。千葉県八日市場市の神社(星宮神社等)の祭事を拝観したさいの、貴重な「副産物」であった。

関東の方々には熟知の、この元日の祭式、これがわたしには未知だった。わたしの育った西日本(広島・京都等)には、このような元日の祭礼はなかったからである。

この点、伊賀(三重県)の出身だった、芭蕉も、わたしと同じだった。江戸の深川に住んで「はじめて」この祭式に接し、「新鮮な、カルチャーショック」をうけたのである。

芭蕉の手紙にある、慈鎮和尚(慈円。鎌倉時代。京都)云々とは、慈鎮の歌に、正月に伊勢の知人からの便りを得て、作ったもののあることに「なずらえた」だけだ、というのである。京都にいる慈鎮にとっては、「伊勢からの便り」が「元旦にふさわしい」と見なされた。当然だ。だが、芭蕉は、何か、それ以上のものが、この「関東の蓬菜」に感じ

た。直感力だ。元旦の床の間を飾る、(関東の人々にとっては)平凡な、この飾り物の中に、彼は鋭く、「何か」を感じとったのであった。

実は、わたしも、今年の一二月、千葉県で見た「蓬菜山」に、これを感じた。ひそかに「古代史探求上の

一課題」を見出ししていた。そして今、知己を、江戸時代のこの俳人の中に発見することになったのである。今年の九月十三日（金曜日）のことだった。

一

それから十日後、二十二日の朝、京都から穂高へ向かった。台風之余波か、長野行きの列車は京都駅で一時間も遅れたけれど、苦にはならなかった。今回の一週間の穂高行きは、ただ「目的地」だけを目指したのではない。その間「よく考える」こともまた、大事な目標としていたからである。

松本に着き、穂高に向う間、市内を散策した。二十一歳（昭和二十三年）から六年間、わたしの青春の街、それがこの松本だった。駅から繩手に向う中間、慶林堂という古本屋に入った。当時はなかった店だが、書物の宝庫だった。あつという間に一時間以上が経過した。芭蕉に関する本と共に、岩波文庫で『実験医学序説』を入手した。昭和二十二年版だった。かってわたしはこの街でこの本を読んだ。学問の方法上、深い影響を受けたのである。

「科学にその真の意味を与うるものは事実の批判である。」
「実験的方法は又科学的方法であ

る以上、科学的仮説の実験的証明ということの上に立脚している。」
（旧漢字・旧仮名は新字に直し、傍点は省略）

これが、著者クロード・ベルナールの提言だ。科学としての近代医学、その方法論だった。肝要なのは、もちろん「実験」だ。しかし、その「実験」のために不可欠の前提、それが「仮説」なのである。その「仮説」を検証する手段、これが「実験」である。

「仮説なき者に、実験なし。」

これがベルナールの提言の核心だ。だが、現在の「学校教育」の中の「実験」は、教科書に書かれている「命題」を「裏づけ」納得する「ためだけの実験、そうなっていないければ、幸いである。真の「実験」とは、「未知への挑戦」なのだ。（平成五〜七年度、わたしが高知県の足摺岬周辺の巨石群に対して行った、一連の実験、調査も、まさにこの立場に立つ実験研究であった。当報告書参照。）

二

今回の穂高滞在の目的も、同じだった。わたしは信州の古代文明に対して、一個の仮説を抱いた。昨年の秋である。わたしを刺激したのは、次の三つの現象だった。

（一）長野県の中信地方（松本・穂高周辺）や東信地方（佐久周辺）などには、海に因む地名が少なくない。島内・島々・小海・海原などだ。

（二）穂高神社には、御舟祭が伝承されている。祭礼の中心をなす「神輿」が「御舟（おふね）」と呼ばれている。その伝承は、安曇族が海から渡来した故実による、という。
（三）阿久遺跡（原村）・阿久尻遺跡（茅野市）から、「掘立柱」による建築物址（方形配列土壇群・方形柱穴列）が出土した。縄文前期前半である。

青春の松本時代、わたしは深志高校の教師だった。冬のストープ談義で、しばしば右の第一・二項が話題となった。地学の先生から「昔は、信州は海だった。その証拠に地中から貝の化石が出ます。」という話が出、社会科の先生が「その頃、まだ人間はいなかったでしょう。」とまぜかえす。わたしは終始聞き役だった。

ところが、昭和五十二年、中央縦貫道工事の終り近く、今まで誰人も予想しなかった発見があった。縄文前期前半、団地のように住居跡が密集していた上、その間に一辺五メートルの正方形の周縁に点々と穴があっていた。「太い柱跡」だったので

ある。

この点、平成三年、茅野市で発見された阿久尻の方は、右のような「太い柱跡」の方が中心をなしていた（阿久の三〇〇メートルそば）。

この「掘立柱をもつ建物」は、縄文早期には出現せず、この前期前半に至って出現した。なぜか。一は、現地（信州）における自然発展。一は、他（信州外）からの別文明圏人の侵入。この二つの可能性が検討されねばならぬ。

すでに『学問の未来』で、わたしは次のようにのべた。

①「二倍年歴」の源郷は、パラオをふくむ太平洋上の領域である。

②この太平洋領域では、気候・風土上、高床式の建物が必須だ。八丈島・沖繩等と共通である。

③倭人伝の「大人」の習俗には、「二倍年歴」をはじめ、右の南方太平洋領域の風俗、生活様式が基盤をなしている（「アルメンゴル」等）。

右の認識を、わたしはさらに「進歩」させた。信州における「前期前半」の「掘立柱建造物」の出現、それは「風土上、必然的にこの様式の建造物を必要としていた生活圏」すなわち、太平洋上の海域の住民の侵入、それが、幾千年の「早期」を終らせ、新たな「前期」に入ることとなった根本原因ではないか。||こ

の「仮説」である。

その「海域の住民」こそ、信州の伝承に云う「阿曇族」ではなかったか。彼等はこの山地に、かって「馴れ親しんで」いた、海域の地名（海にちなむ地名）を付けたのではないか。

たとえば、「阿曇」は「阿津」（わが港）の幹地名に「海（み）」という接尾語を付したものである。（さらに「み」は「かみ」の「み」であり、「女神」をしめす。「イザナミ」の「ミ」である。

三

以上は、あまりにも大胆な「仮説」であった。何より、焦点をなす、穂高神社の「御舟祭」を未だ見たことがなかった。もちろん、当地と当神社には、何回か訪れていた。この地から、深志高校へ来ている生徒も、少なくともなかったのであるから。しかし、当の祭自体を直接「見た」とはなかったのである。（当「御舟祭」は九月二十七日に行われる。曜日がウィーク・デイであっても、変更はない。）

従ってこれを「一個の学問的仮説」として提示する前に、現地にこれを実際に見なければならぬ。これが必然の要請であった。二十二日、夕方前、松本から大糸

線で穂高に向う。三十分。駅からほど近く、目指す安曇民俗旅館に入り、二階の一室で一週間の作戦を練る。（ここの「きのこめし」が絶品だった）

翌朝、雨上りの空、はじめて穂高神社に向う。境内で御舟祭の神輿、御舟の「骨組み」を見る。これが、わたしの「目標」だった。今回、お祭りの当日（二十七日）より五日早く、当地を目指した。その真の目的はここにあったのである。

昨年、十二月。当地に来た。現地の下里讓二君、上高地の奥原教永君、いずれも深志の一回生、すでに七十才のはずだが、彼等に導かれて当神社を訪れ、宮司の穂高守さんに紹介された。そのさい頂いた、宮地直一さんの『安曇族文化の信仰的象徴』（昭和二十四年）は貴重だった。そこに「穂高神社例祭渡物の船骨組」として掲載されている挿図は、印象的だった。『筏の上には二枚の帆を張った姿』と、わたしには見えたのである。

現実の神輿は、その上に飾りつけられた「舞台」があるため、「動く舞台」の観が濃厚だが、その下にある「骨組み」そのものは、右のようになわたしには見えたのである。けれどもそれは、あくまで「本の挿図」上のことだった。その実態を

現地で確かめたい。それが今回の穂高紀行の、一番のねらいだった。そして二十三日朝、わたしはその「骨組み」を見た。あの挿図通りだった。やはり、宮地氏の記載にあやまりはなかった。

その姿は、わたしには「古代の、帆走する筏」を想起させた。『倭人も太平洋を渡った』（創世記、現在八幡書店刊）の挿図にせめられていた類型のものである（インド・エクアドル）。

もちろん、今回の「確認」によっても、何等の「断定」はなすべきではない。しかし、わたしの「観点」を一つの可能性として「保持」しつづけてもよい。自分に、そのようにハッキリと言いつけたのであった。

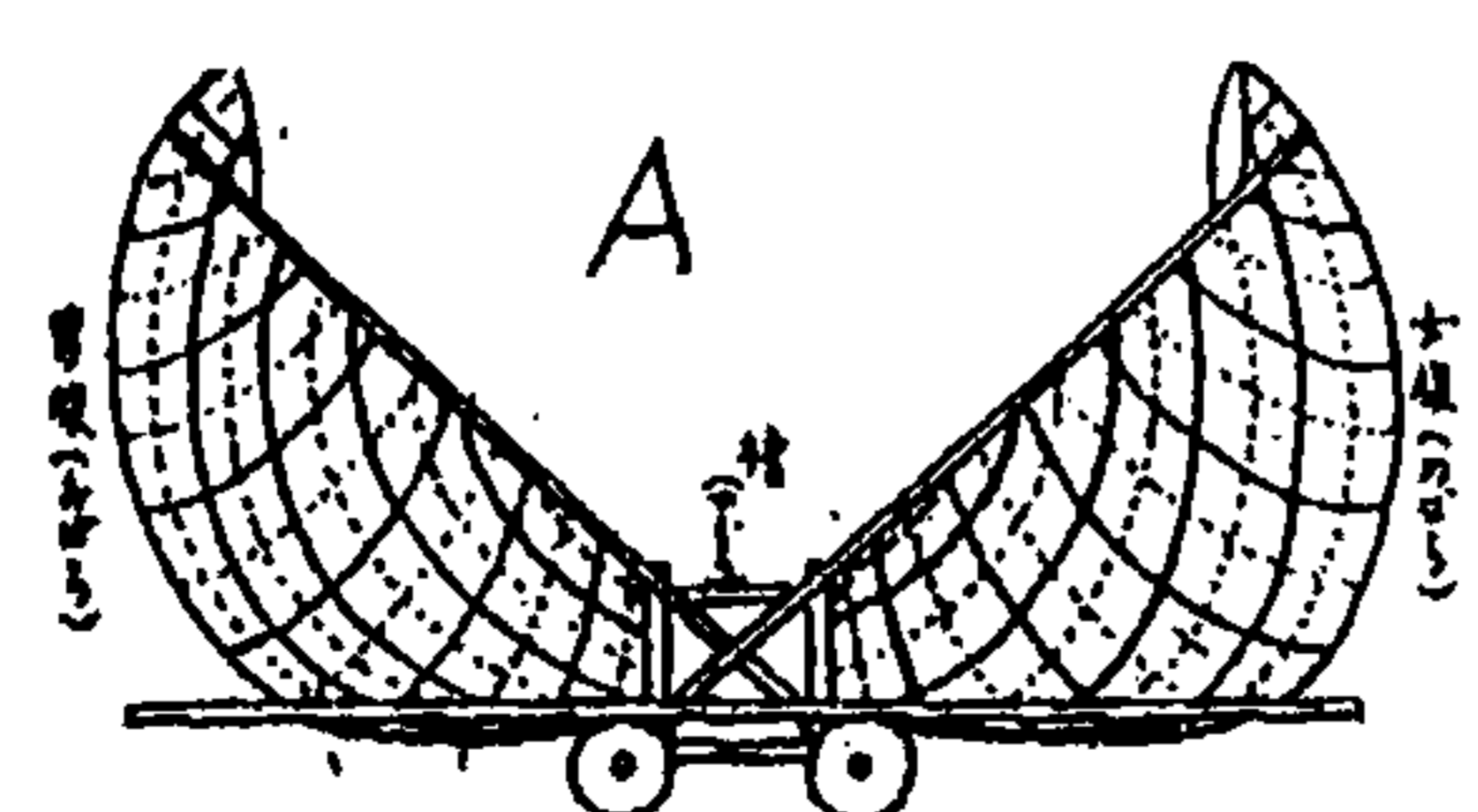
四

貴重な「副産物」に遭遇した。

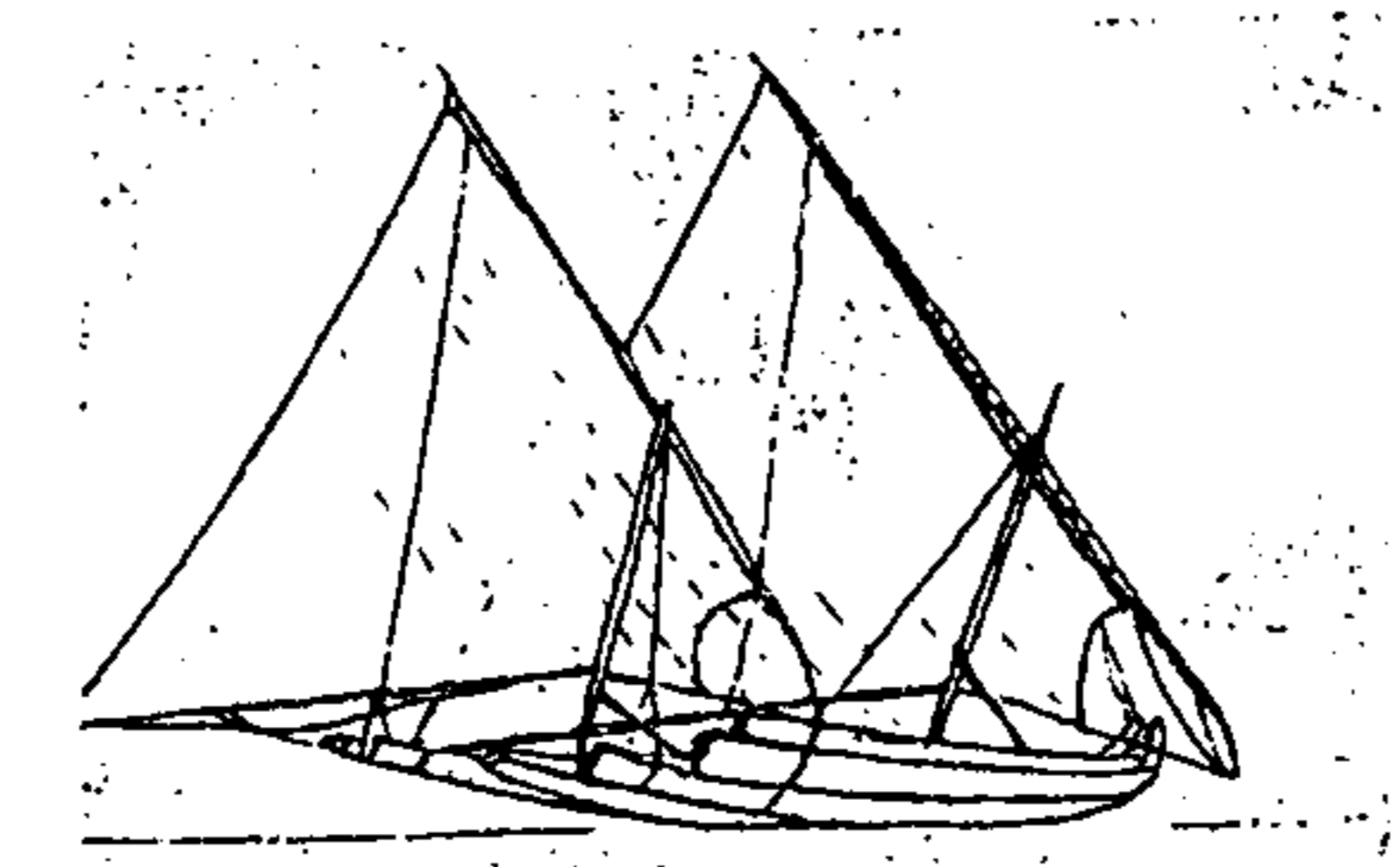
穂高町の一角に有明山神社がある。案内には「有明山のふもと宮城にあり、有明山の信仰崇拜する山岳信仰神社」とある。行った。大和の三輪山と同じく、御神体は山自体。社殿は拝殿だけ。ただし社殿は新しい。

境内に嚴重な扉をもつ宝庫がある。ところが、背後に穴を掘り、下から宝物を盗み出されたという。知能犯だ。「残っているのは、カスばかりですよ。」当神社の宮司さんはそう

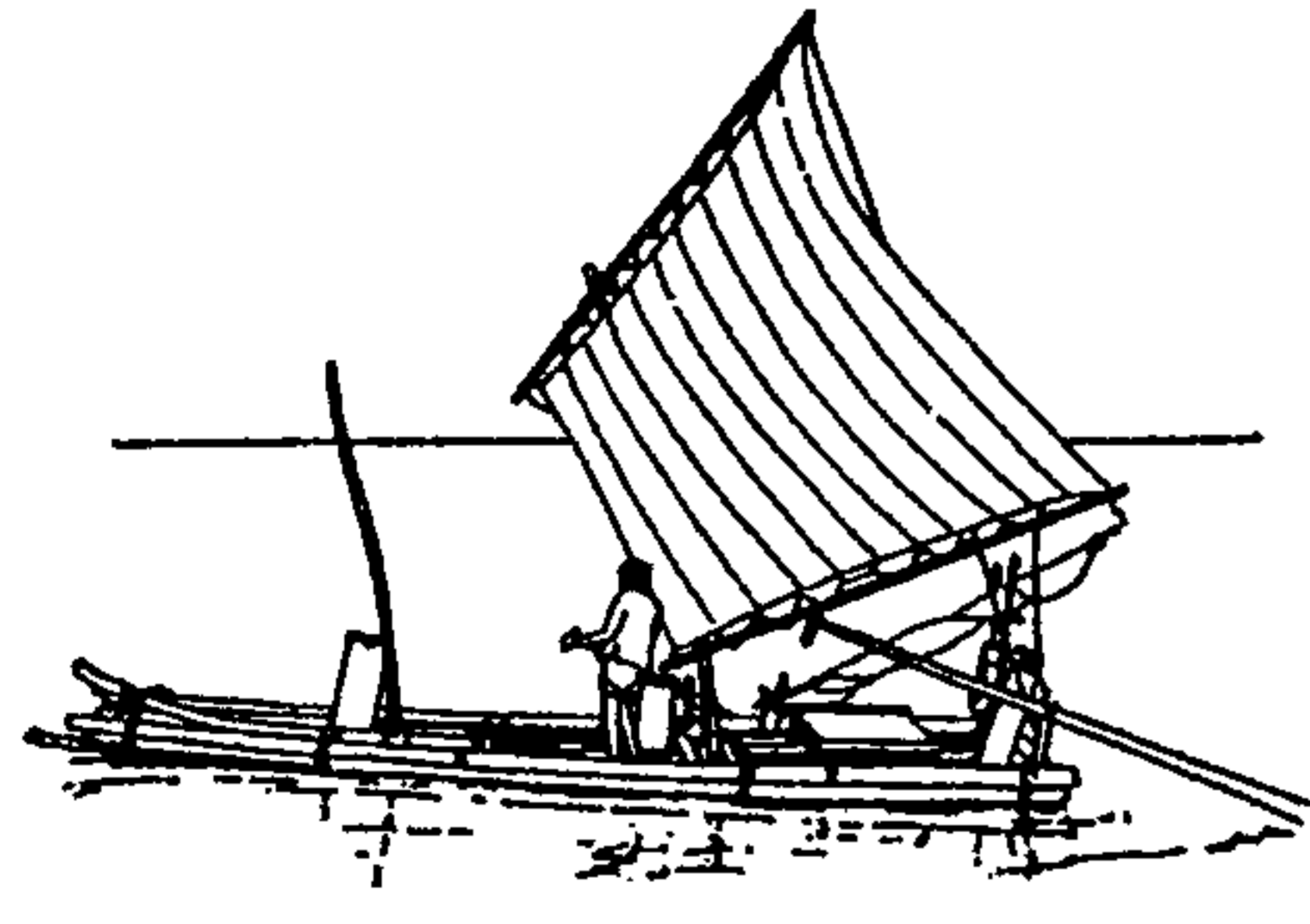
言われながら、敢えて中に入れてもなかった。その「カス」がすばらしかった。縄文土器や黒曜石の鏃がギツシリと残されていた。盗まれた宝物とは、中・近世の鎧などの道具類だったらしい。幸いにも、知能犯には、古代への「目」が欠けていたようだ。



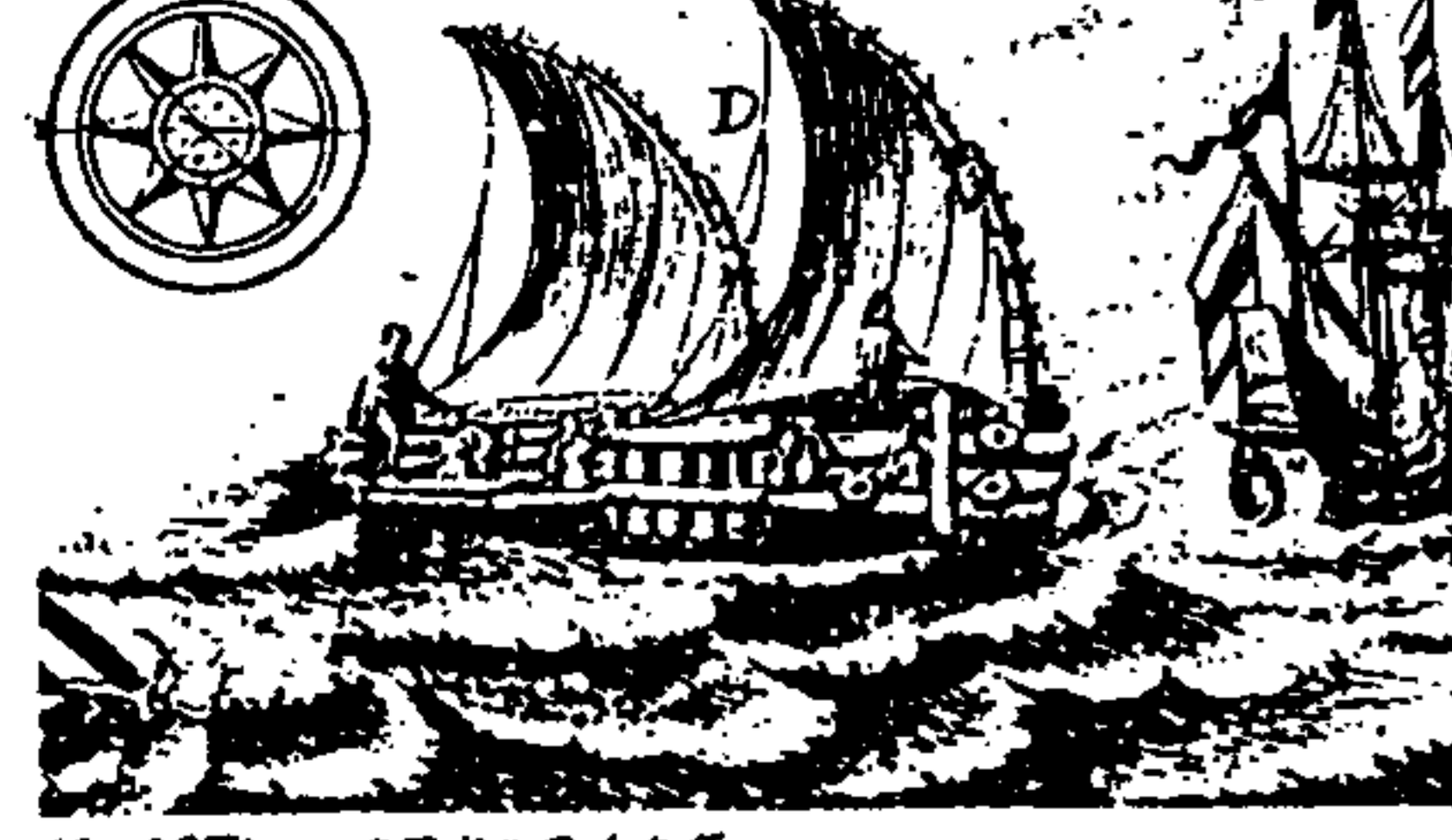
穂高神社例祭渡物の船骨組 (宮地直一『安曇族文化の信仰的象徴』p119上段)



(1-12回) インドのコロマンデル海岸のイカダ (コーネル1946, さし4211)



安南のイカダ (同p36)



(1-18回) エクアドルのイカダ (シュビルベルゲン1919, ヘイエルダール1952, さし4267によって複製)

エクアドルの筏 (同p36)

インドのコロマンデル海岸の筏 (『倭人も太平洋を渡った』『帆走するイカダ』p33)

この神体山信仰が、縄文にさかのぼる。こと、その証跡と見えたのである。

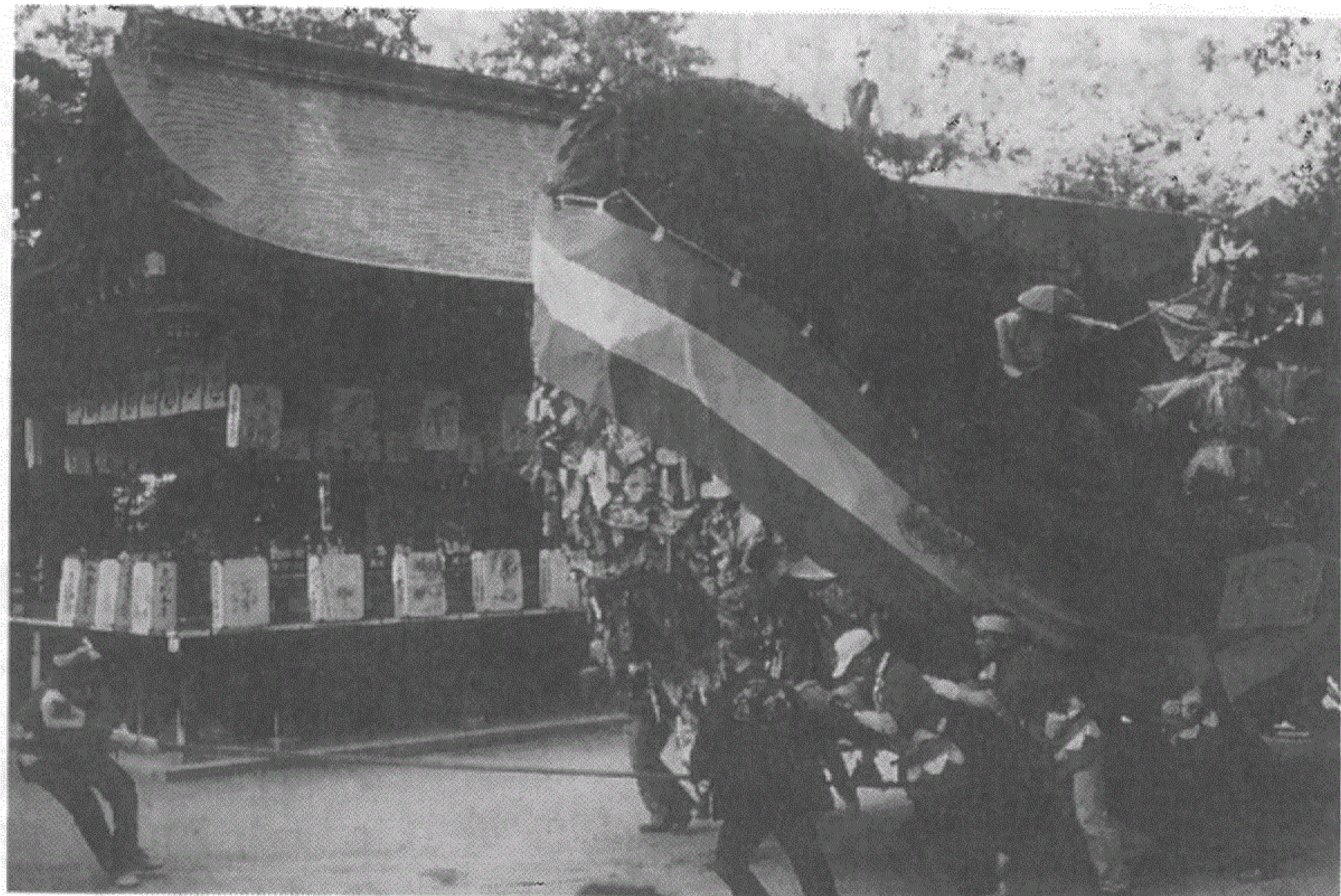
さらに展開があった。現地の「八面大王の居住窟」として著名な魏石鬼窟(ぎしきのいわや)に向った。有明山の一画だ。中から古墳時代の遺物(馬具、耳環等)が出土し、古墳と認定されたが、同時に大量の鉄釘・銅銭・陶磁器等、十八世紀後葉から十九世紀中葉の遺物が出土した。修験道の遺物である。しかしながら、この洞穴を含む全体は、巨岩状であり、古墳期の使用自体、すでに「転用」乃至「再利用」であったことをしめしている。「発見」は、その脇道を奥へと数十メートル入ったところにあった。「八面大王の爪跡」と言われる巨岩群である。案内の下里君は小学校時代、クラスの先生に連れてきてもらった。六十年前の記憶をたどり、先日「下見」をしてくれたけど、見つからなかった。それが今回の「本番」では見つかった。爪跡自体は、まさに「巨人の爪跡」様の凹みが幾条も巨岩に印せられている。もちろん、大自然の造作であろう(あるいは海底時代の侵蝕か)。だが、中・近世から古代にかけての人々には、「神の造作」と見えたであろう。この巨岩群は、神体山群(有明山、弘法山)の先端部にあり、その前面は広場(現在は雑木林)をなしている。ここが修験者にとつての「儀式(ぎしき)の場」とされたのであろう(「魏石鬼」は、あて字)。しかもそれは、ただ十八・九世紀だけのことではない。おそらく縄文期、本来「山」自体を御神体としていた時期の祭式の場がここであった、という可能性があろう。現在の「新しい拜殿」より遙か以前の、古来の祭式の場の一つ、それがここ「八面大王の爪跡石」の前面の地だったのではないか。そういう思いがけぬ「発見」に遭遇しえたのであった。

五

穂高神社のお祭の当日が来た。神輿や子供の神輿でにぎわい、神輿が撃突し合う、喧嘩祭りを堪能させてもらった。今日の神輿には、上の舞台に義経や曾我兄弟のような中・近世の英雄のワン・シーンが飾りつけられている。青森のねぶた祭りの場合と同じだ。近世の飾付け、という立場からは興味深いのであろうが、わたしのとつての興味は、その下の骨組み。それはすでに確認していた。当日の発見、それは祭りのはじまり、その冒頭にあった。境内の神馬の前で、宮司さんたちの祭式が行われた。四方に竹を立て、その前で礼

式を行う。すでに宮地さんの本や青木治氏の『安曇の歴史、穂高神社とその伝統文化』で知っていた、標山(しめやま)の儀礼だ。祭日の半年前、穂高町の周辺の四点で、この祭礼を行う。以来、この地(四方)は「神聖の地」となる。その原点が、祭日の冒頭の、ささやかな一刻の、この祭式なのである。

大衆的な喧騒、それももちろん祭



穂高神社神楽殿を回る御舟

の特徴だ。だが、ひっそりと行われる、この一刻。ここにこそ古来の原点、「神の依り代(しろ)」が明示されている。わたしにはそう見続ぎえた。

この瞬間、了解した。あの、芭蕉

が目にした「蓬莱山」の原型がこれだ、と。元旦に各家の床の間に飾られる、このミニチュアは、本来「神の依り代」なのである。ちょうど、各家の神棚の神祠が「神社のミニチュア」であるのと同じく、各家の「蓬莱山」はこの穂高神社のような「神の依り代」という原型のミニチュア版なのであるまいか。

この点、賑やかな、神輿の飾り物にも、必ず「山」が描かれるという。日本アルプスを背景にした御当地ならでは、という感じだが、これも単なる「山岳」ではない。「標山(しめやま)」をシンボライズしているものなのではあるまいか。とすれば、一見華やかな飾り物にも、その中には、一本「古代からの芯」が通って現代に至っていたのである。

六

今、取り組んでいるのは、仁科宗一郎氏の『安曇の古代』(池田町・柳沢書苑刊)だ。氏は『仁科濫觴(らんしょう)記』をもとに、松本・豊科・穂高・池田及び明科や浅間に至る一大湖沼の存在を仮定し、「島・淵・崎」から「かいと」(海戸・海渡・海道)などの地名の縁由をここに求めておられる。貴重な研究だ。

ただ「かいと」や「海道」は、今

わたしの住む、京都近郊にも少なくない。また先にあげた、東信地方の「小海」などは、この松本湖（あるいは豊科湖）の仮定からでは、説明しえないのである。

ともあれ、多くの伝承・史料を克明に追求し、記録された、この本は貴重だ。氏の長男、惇君（信州大学教授）は、深志の四回生。父君の御本を、かってわたしへ贈っていた。今、大変有益な先行書となっていた。今回、大変有益な先行書となっていた。下里君・奥原君と共に感謝したい。

また五回生の岩倉邦隆君の導きで善昌寺（松本市）を訪れ、長野の善光寺関係の貴重な史料に接した。他にも、諏訪の平林平治君・横沢英一君と布半（旅館）で会い、楽しい一夜を過ごしたことも忘れがたい。いずれも「落ちこぼれ教師」だったわたしにとって、過分の御厚意であった。

九月二十九日（日）、最後に穂高神社へ参った。この一週間、幾度となく、朝に夕に足を運んだ、この境内。神輿は再び解体され、トラックで運び出されるのを見送った。

今回、青山富士夫さん、平田英子さん、木下治代さんのおかげをこうむった。記して感謝したい。

補注

① 「帆走するイカダ」それは古代文明の生き証人だ」はコドウイン・ドーラン・ジュニアによる。八幡書店版（現版）『倭人も太平洋を渡った』で御参照下さい。

② なお穂高町長・平林伊三郎氏、書家にして郷土史家の西川久壽男氏、道祖神等の民俗研究家・宮島潤子さんの御指導をえた。感謝する。一九九六年一月一四日

出雲銅鐸に関するデスクリサーチ

—古田武彦氏との電話インタビュー—

1、前回（1988、昭和59）出土の銅矛・小型銅鐸を1期（A型）、今回の銅鐸を2期（B型）とする。両者の時期は異なる。

4、奈良県上町・豊岡市気比の銅鐸のように下に玉石を敷き、丁寧に埋納した例があることから、神そのものである可能性が高い。

1期は前に考察したように、「天孫降臨ショック」とすれば、2期は神武ショック（神武・崇神の大和占拠、銅鐸圈侵攻）であると考えられる。2、銅鐸は楽器説と祭器説があり、その両者であろうといわれているが、単なる道具だけだったとは考えられない。神そのものか、百歩ゆずっても「依り代」であろう。

奈良県上牧遺跡の例も同様で、この二つは出雲のと「兄弟銅鐸」といわれているが、どちらも弥生中期乃至後期初頭どまりで、それ以後大和からは出土していない。

3、森浩一と佐原真の《壊された》壊れた》論争があり、その後はつきりした発掘例があって《壊された》ことで決着し終わった（と、わたしには見えている）が、この論争は貴重で、「それではなぜ壊したのか」という点は結論が出ていない。その点を追求すべきである。

5、同範銅鐸の問題、産地の特定はこれからの問題だが、（今の論点にとっては）余り重要ではない。しかし但馬や大和（及び近畿周辺）から延々と出雲まで運んだというのでも可能性は確かにあるが、より少ないケースだ。今後出雲から鑄型が出る可能性がより高い。加茂遺跡からも1期の小型銅鐸の拡大型が出ている。今回の銅鐸も技術的には同一線上にあると考えられる。

6、文献面からは、『出雲風土記』

（大原郡神原郷、岩波大系本235）に「大神の御財（みたから）を積み置き給ひし処」の記述があり、今回の加茂町に当たる。なお、1期の銅矛は『東日流外三郡誌』に荒神谷に埋めた記述があることは先に指摘した。

7、神武など紀の「大倭……」はみな「ちくし」であるという考察は以前発表した。初期の近畿大和政権が九州の分派（過激派）として行動したことは想像できる。出雲は筑紫と近畿の両勢力に挟み撃ち状態になり、パニックに陥って銅鐸を隠したのが今回発掘されたものであろう。

8、出雲市から直径約400mの大型環濠集落（弥生後期）が発見されている。この現象は筑紫・近畿両勢力の挟み撃ち状態に対抗するためであろう。

9、松本清張氏等がベトナムの例を挙げて主張した（祭祀不使用期間の）埋納貯蔵の説は、出土状況を見ると、それだけでは考えにくい。少なくとも現在まで掘り出されていないことは確かだ。三角縁神獣鏡などを奉ずる反銅鐸勢力（九州と近畿）が勝利し、銅鐸勢力のその後の消滅を物語することは確かである。

〈強調点〉以上は今年一〇月二六日に得たアイディア（8のニュースは「産経新聞」朝（次ページ下段へ）

書紀と唐代史書の倭国と日本

中小路駿逸

(七月二十八日講演概要―二)

書紀の天地開闢

書紀の冒頭には「始めにある物ができた」と書いてあります。(神代上)できた物は、書紀本文では「国常立」(古事記と書紀一書では「天御中主」と書いてある。また「葦牙」とも。これを一書によって「神聖」「神」「神人」「人」とさまざまに定義されている。古田さんは「神話に先立って人話があった」といっていますが、「人」が最も古く、「神聖」「神人」がその次、「神」が新しい、その順だと思ふのです。「我々の先祖はこのような人であった」というのが原初的な形であった。これだけ四通りも並べられると嫌でも解ります。

書紀と宣命

これがイザナギ・イザナミを経て天孫降臨・神武へと続くんですが、言いたい所は「だから我々はこの国に主権を有するのだ」ということです。「統日本紀」に文武が和文体の詔勅、宣命を出していますが、そこで「天孫以来」といっている。書紀では「神武以来」といい、宣命では

「天孫以来」という。名分は天孫に始まりそれを文武で受け継いだ、といっている。

従来日本の歴史、「いろいろあっても七世紀以前から大和の王権が飛抜けて一番尊かった」これが通念だった。「およそ権威権力のトップにあるもの、常に大和の天皇であった。それと自他共に許すもので日本列島の内外で認められていた。七世紀以後はもちろん、以前でも『中心の王権』という記載があればそれは大和の天皇のことに違いない」これをわたしは「一元通念」と名をつけました。

「溯れば神武天皇に、さらに天孫に、さらにイザナギ・イザナミに行く。その一本である」ところが朝廷自身が「それとは違う」と書いてあるんですね(書紀)。王位は神武以来我々が受け継いだ。それ以前は九州の本家で天孫降臨以来受け継いでいる。それで良いじゃないですか?」と書いてあるのです。(現代の学者が)そう切替えるには相当手間が掛かるでしょう。それが恐いので逃げ回ってはるわけです。ここに突っ込むことは学界のタブーだったわけで

す。物事を有りのままに受止めようとするかどうか、今、日本は実験台になっているのです。

人麿の歌に現れた王権の変化は日本書紀・統日本紀にも反映しています。大きな一つの切れ目、変化があったんだということ、これは国内の(日本書紀・木簡など)史料にあるだけではなく、外国の史料にあるか? あるんですね。

ここには歴史に関する資料だけ挙げました。旧唐書、新唐書、唐会要、通典です。

唐代文献に出た倭・日本の地形

いずれも唐が滅んでからできた、唐代を対称にした史料です。旧唐書は唐の後の五代の時代に、新唐書は北宋のとき、唐会要と通典は八世紀の宋の時にまとめられたものです。ですから成立は日本書紀がはるかに早いのです。実際には中国の史料に現れる倭国の姿はある時期までは非常に安定しています。「山のある島である」。三国志から隋書までそう書いてある。都の場所も同じで変わっていません。変化が出てくるのは唐関係から。旧唐書には「倭国は古の倭奴国なり」後漢書に光武帝から金印を貰った国として書かれています。「新羅の東南大海の内に海島によりて居す」、「貞観二十二年まで

「出雲銅鐸に関するデスクリサーチ」(前ページよりつづき)

どのニュースをもとにしたものに過ぎない。従ってこの点の是非は、あくまで現地(出雲)に足を踏み入れた上でなければ確かなこと(私の見解)は出せない。秋田孝季の言のよいうに「歴史は足にて知るべきもの」だからである。従って以上はあくまで「デスク・リサーチ」としての一案であることを強調する。

古田武彦

使いを寄越した」と書いてある。そこで別けて「日本国なるものは倭国の別種なり」：別種というのはもつと突き詰めねばなりません、王の先祖は同じで王権は別だという意味かと思ひます。「：其の国日辺にあり、所以に日本を以て名と為す」「或いはいう、倭国自らその名の雅ならざるを悪み改めて日本と為す」「或いはいう、日本はもと小国、倭国の地を併せたりと」色々な説が書いてある。倭国が改名したとも、今の日本の国に併合されたんだともいう。「其の国、東西南北各々数千里、西境南境は皆大海に至る。北と東は大山ありて限りを為し、山外は即ち毛人の国なり」と

「山島の国」からこういう地形に変わっている。その外側は毛人の国だといっている。こういう国に変わっているのです。

新唐書になりますと、「日本は古の倭奴国なり、海中の島に居す」と、島です。ところが後に「国、日の出る所に近し、以て名と為す」という。

「或はいう、日本は即ち小国、倭の併す所となる、使者情を以てせず、故に疑う焉」「その国、総て方数千里、南西は海にいたり東北は大山を限り、その外は即ち毛人なり」とありとあります。その次に文武即位が出てくる。旧唐書は「倭国と日本国は別の国だ」と書き、新唐書は「一貫して同じ国」と書きながら、途中から島の国から陸の国に変わっていくのです。

唐会要では、まず倭国を書き、次に日本国を別国として書く。また「倭国の別種」とも書いて、これは旧唐書と同じです。日本国は「長安年間に粟田真人がきた」ということから始まる。これは『続日本紀』と合うのです。文武即位の後、粟田真人が遣唐使になって行っております。つまり、高天原以来の王権だと宣言してから、粟田真人が遣わされて行っているのです。また「日本は本小国、倭国の地を吞併す」といっています。

通典は、「倭国、一に日本と名づく」倭と日本とは同じだといっています。「自らいう、国日辺にあり、以て称となす」ところが、そのすぐ前に、貞観年間に唐から使いが行って、王さんと喧嘩して帰ってしまった。「これによりて遂に絶つ」とある。

唐会要も倭国条の最後に「これによりてまた絶つ」とある。なぜ「また」というと、隋書の最後に国交が絶えたと書いてあるからだと思えます。「遂に絶つ」つまりこれ以後国交はなかったという意味。それなのに長安三年「粟田真人がきた」と書いてある。でも「倭は一名日本」という。つながっているのやら切れているのやら、「何かある」と思われます。何かなかったらおかしい。それが唐になって起こってる、というのです。唐の役人がそう書いている、日本の役人もそう書いている。「全部隠してませんよ」と出してるんです。元来地方・大和の王権が本家の王権を継いだ。その時国号はすでに日本であった。

「日出る所に近し」とは？

それではなぜ日本と言ったのか？旧唐書「その国日辺にあり、故に日本を以て名と為す」、新唐書、「使者自ら言う、国日出る所に近し、以

て名と為す」、通典「国日辺にあり、故に以て称と為す」、唐会要「その国日辺にあり、故に日本国を以て名と為す」：今まで何となく読んでいたんですが、ハッと「これおかしい」と気がついた。理由「日辺」「日の出る所に近し」と結果「だから日本とした」とは合わないんです。「辺」とは何かのそば・端っこのこと、そこズバリではありません。隋書では山島の国の王は「日出る所の天子」と名乗っているではないですか。その国が日本というなら「国、日出る所にあり」と言わなくてはならん。「日出る所に近い」とは、その国の都が「日出る所」ではないが、そこに近いところにある、ということですね。旧唐書は史官が地の文で書いている。確信があったからです。新唐書は「使者自ら言う」としてある。遣唐使が自分でそういったのです。わたしは「日辺にあり」「国日出る所に近し」と言っている使者の国は『日出る所』とは別の、しかし遠くない所にあつたものと思います。「日本」という国号自身が彼等の発案ではなく、踏襲されたものである。国号を継いだこと、日出る国とは別の国であることを併せて言ったのだ。奈良の都は筑紫の都とは別で、しかし遠くはない、これが結論です。結局、答は初めから書いてあつた、そ

れに気がつかないだけであつた。その感を深くしますね。(おわり)

本を紹介

「日本の選択」

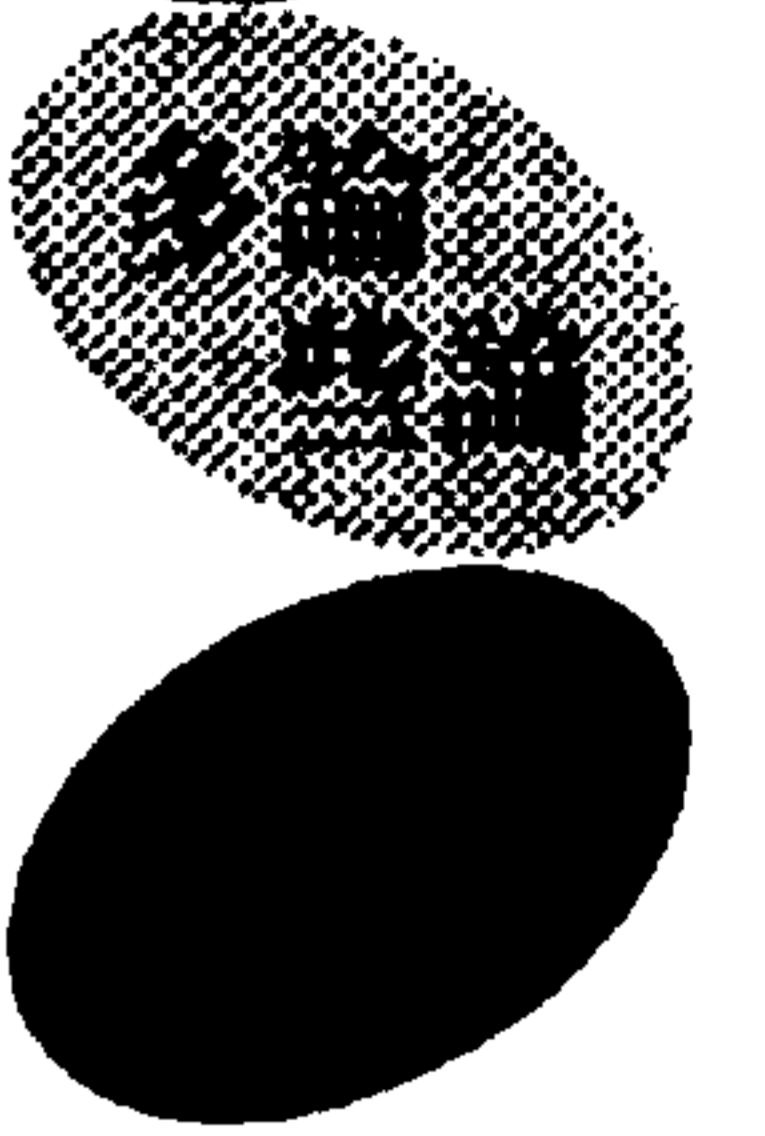
文化勲章受賞者であり、世界的に知られた経済学者・森嶋通夫氏の著書に古田先生の名前が出ていますよ、と木村由紀雄さんから電話がありました。早速調べてみました。

『日本の選択』（岩波書店・同時代ライブラリー）の中に「倭国とは一体何であるか。私の考えは（中略）古田武彦の一連の日本古代史研究に依存している」とありました。氏は専門が歴史と異なり、またロンドン大学の名誉教授でもあり、年間のほとんどを海外で暮らしているなど、何等日本の学界の思惑に顧慮する必要がない立場にあり、だからこそ古田史学を素直に評価できるのでしよう。

権力におもねることなく、自分の信念に基づく学説を発表する古田先生を、認める人は認めるのだと、心強く感じました。

(高田かつ子)

たろん
サロン



会員のページ
筆者はいずれも本会会員

なにわ・考

(二)

青山 富士夫

前回の冒頭、十六行目の次に左記の神楽歌が脱落していました。これを補ってお読み下さい。

なにわにさくやこのはな、ふよ
(冬)ごもり今を春べとさくやこの
はな

博多湾頭に難波を想定したことにより、さらに私が考えてみたい一事がある。

ここにある、万葉時代の、大阪難波地方の推定地形図を、見ていただきたい。(小学館版万葉集1)

内懐の河内湾は、だいぶ陸地化が進んでいるが、まだ潟湖の状態が残っている。蘇我氏打倒の直後、孝徳天皇が、都した「難波長柄豊崎宮」は、その海側に細長く横たわった台地の、先端近くにある。長柄(ながら)とは、長い地形が名詞化したもの、豊崎とは、岬の美称である。孝徳の宮殿は、こういう土地に置かれ

のにはかならない。

因に言う、住吉の古訓はすみのえ。再び先の博多古図を見ると、住吉神社は冷泉津の奥まった入り江の隅の所にあたる。即ち、隅の江が語源ではないかと灰塚照明氏は、鋭く指摘される。

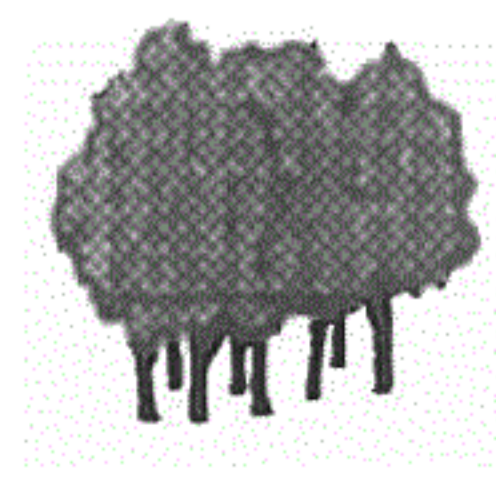
祭神の身元から言っても、ネーミングの由来から考えても、博多の住吉が古く、大阪の住吉はその移動型である。そうすれば、他の草香江、姫島、難波は、反対に大阪から博多方面に動いたものとは、考えにくいではないか。まして、河内湾一帯は、古墳時代になって、新しく陸地化が進んだ新開地である。

現代では、大阪の住吉神社が全国の総本社として扱われているらしいが、その社伝によると神功皇后の時代、住吉の神が、どこか社殿によい土地はないかとあまねく天下をたずね廻ったあげく、ここがベストと選んで、今の住吉神社の地に居を定められた、ということになっている。もしかしたら、博多の住吉の神が勧請されたのは、神功の時代のことかもしれない、と私は考えている。

今、東京の海沿いに佃島がある。現代も明治大正時代の面影を偲ばせる、風情の豊かな一画である。その佃島は、徳川家康が江戸城に移った時、東京湾の新鮮な魚を城中に供給

させるため、大阪の佃島の漁師たちを移住させた所、と言われる。佃島を訪れてみると、関東では珍しい住吉神社が氏神として巷の中央に鎮座して、なるほどとうなずかせられる。神様は独り歩きなどしないものなのだ。

そのように、河内湾にのぞむ一群の地名も人の移動とともに、博多湾沿岸から移ってきた。端的に言う、筑紫人のコロニーがあったと考えると、ここに都を置いた、孝徳天皇の思惑は何であつたらう、などという問いに飛躍する。実力者蘇我を倒して、権力の座についたのなら、何を措いても、蘇我氏の旧領を制圧することが急務のはずである。それを、便利な船着き場であつたとしても、大和河内一円を統治する上では、むしろ僻地とも言える、難波岬の先端に、なぜ都を持って行かなければならなかったのであらうか。このことは、蘇我氏打倒の立役者である中大兄が、なぜ自ら王位につかなかつたか、という疑問とともに、日本書紀は何ら説明するところがない。しばしば歴史の真相は、語られざる謎の奥に存在する。私はこの謎に大きな興味を抱いている。



再び「六月肺出」について(二)

影山 星二

(一)年代の古いほど両者の差が大きき紀元前では一年ほどになる。
 (二)問題の六〇七年では半月ほどの差である。

(三)一三〇一年以後は一日以内の差になっている。

(四)全体的に両者は傾向的には一致しており、後者の精度が向上していることが判る。

さて、一項で問題とされた六八四年の彗星であるが、斎藤氏は詳細に述べておられる。

六八四(天武十三)年は彗星が多かった年で日本書紀は七月(日、中、独)、十一月(日、欧)と二個の彗星の記録を残しており(一)内は「記録国」、さらに陰暦九月には中国「旧・新唐書天文志」のみであるが彗星の記録がある。その三つのうちどれがハレー彗星であるかを最新のコンピュータ計算により追求している。

その結果日本、中国の記録の西もしくはは西北という出現状況などから七月(新暦九月)の彗星がハレー彗星であると断じている。(詳細は「星の古記録」を読みたい)

また計算結果のまとめとしてBC二四〇から一九一〇年の平均周期は七六・九二年が得られ、これまでの出現間隔と平均周期との差をプロットすると資料(二)のようになり、二千年以上にわたる曲線は三つの山と谷を示し一種の「うなり」現象のようである。これは木星と土星の摂動の影響としておられる。

三. 米田氏の意見について

米田氏は一九八六年と九回へだたった一三〇一年の回帰との間を周期は一定としておられる。この間に周期は凡そ一変動し最高は約七十九年(千三百一年)最低は約七十四・五年(一九一〇年)である。この間を一定と見なすのは全く無理であろう。しかもその間の一定とした仮定データを更に九回外挿することにより更に誤差は広がることになるのだ。

六八四(天武一三)年の記録は信ずべきものであるということとは前二項で述べた。それでは此のデータを基にしてその一つ前のハレー彗星回帰の年代を考えてみよう。六一七年では次までの周期は六十七年。六〇七年では七十七年。やはり六〇七年が正しいことは自明の理で発見日は旧暦三月で「六月肺出」とは無関係である。

一九八五年十二月回帰とジオットが見た一三〇一年九月の回帰とを周

期一定と見て米田氏が推定された六一七年六月の六月というのは偶然の六月なのである。さらに、百歩譲って米田氏の言われる七十六年一〇日一定周期が正しいとしてみよう。一回ごとに一〇日しか変わらないとすれば、その前後の回帰は六月に極めて近く、「六月肺出」の出現年代は限定できないのではなからうか。

また米田氏は一九一〇年のハレー

彗星について太陽から離れてゆく状態のみが観測され、その観測記録による近日点通過日が一ヶ月近く遡ることは疑えないし、同様に他の近日点通過日も疑問があると言われる。しかし前述の資料が示す如く一九一〇年のハレー彗星の観測は前年の九月から観測されており、米田氏の示す意見は事実とは全くかけ離れているのである。

ハレー彗星の回帰の年数が約一〇回毎に周期的に変動しその幅がプラス、マイナス二〜四年であるというのは科学的事実なのである。歴史学も科学であるからその事実の上に立つて論議すべきものであると思う。

四. 「六月肺出」に関わる彗星は

しかし、米田氏は「隋書」天文志を調べられた。これは筆者などとはとても及ばない所である。

その中で ① 開皇十四年(五九四)十一月 ② 大業三年(六〇七)

三月 ③ 大業十一年(六一五)六月 ④ 大業十三年(六一七)六月の彗星観測記事を見出されている。この中の ② 六〇七年三月のものがハレー彗星であろうことは間違いはあるまい。また③・④はハレー彗星でないにしても六月出現とあり、融天師彗星歌の史伝とともに「六月肺出」に関わりのある彗星である可能性は非常に強いのである。

今後のご研究に期待いたします。前回の文にも書いたように筆者は米田氏の著書に対しては大いに敬意を感じているものであり、それ故にこそ疑問を呈しているものである。筆者の気持ちをご理解頂きたいと念ずるものである。

(一九九六年六月一九日)

☆

「君が代」の源流を

訪ねる旅

志賀海神社の山誉め祭りを中心に、福岡周辺の九州王朝史跡を訪ねる旅行会です。くわしくは同封パンフレットで。

期日 一九九七(平成七)年四月一四〜一五日(月)〜(火)

参加費 一三、五〇〇円(現地参加現地解散)

講師 灰塚照明氏

古田先生洛西に在り

立川市 福永晋三・伸子

9月15日、tokyo古田会の京都・奈良探訪旅行に同行させて頂き、

一年はお会いできないと思われた先生と早々と再会。妙な安堵感に浸る。

京都駅からバスで竹林公園へ。車中、先生御自ら近況報告。足摺岬巨石群

研究調査の報告書の仕上げ、『海の古代史―黒潮と魏志倭人伝の真実―』

(原書房)と『神の運命―歴史の導くところへ―』(明石書店)の刊行

が同時進行で忙しく、『和田家文書』の箱(東京で複写し、数十の段ボール箱に詰めるお手伝いをした。偽書

説の連中に見せてやりたいとの矛盾にさいなまれたのが懐かしい。)を

聞く間もなかったと話された。正直、少し落胆、期待してましたので。

竹林公園着。先生がガイドの園内散策、茶会、そして茶席での先生のお話。豊の上での拝聴も久しぶり。

◇バツアヌ共和国のエファテ島から縄文土器出土。かつては「似た」土器として、日本から離れた所にある

から、バルディビアも独自の発達と、反エバンス説の論拠になっていた。

一転、縄文人が海流に逆らって「航海」していた。海流に乗ってのバル

ディビアへの航海は無論、可能。バ

ツアヌの縄文土器はエバンス説の傍証となる。

◇東北のオシラ様は男女一對の神。女は人、男は馬の頭に人の体。馬が

神様である。宮城で馬の頭を刻んだ一万三(一)四千年前の石片が出たが、

当時の日本には馬はいないとされている。『東日流外三郡誌』に曰く、

津保化族が馬を連れて三内に来たと。彼らの神様は馬。神社に神馬。絵馬

の奉納。馬が神様の長い時間帯があった。人間の奴隷になったのは最近のことだ。

◇蓬菜に聞ばやいせの初日より芭蕉も私(先生)も関西人で関東

の蓬菜(正月飾り)を知らなかった。芭蕉は神代につながるものと直感し

たようだが、蓬菜は扶桑の地にあるという。だから、扶桑は関東の可能性が高い。関東の人は蓬菜の形式や

編年をやると面白い。

このほかに、吉野ヶ里とイギリスのメイドン・カッスルの環濠遺跡の

当時の仮想敵国は、呉でありローマ帝国であった、神は最初その民族の

顔をしていたが、多民族に崇められるためには偶像が禁止になっていく

など、いろいろのお話をあの熱心さ

で語られた。tokyo古田会newsの第5号に、田島芳郎さんのすばらしい報告がありますので機会があったらお読み下さい。

この後、あちこち廻りましたが、印象深かったのが、先生が『「邪馬台国」はなかった』をお書きになっ

藤井さんの手紙

熊本市 平野雅曠

大分県の九重町在の藤井綏子(やすこ)さんは、車椅子を使われる身でありながら、お嬢さんのご協力であらうか、方々に出掛けて古代史の研究を続けられ、その活発なご活動には出無精の私など全く頭の下がる思いであった。

既に数冊の高著の恵送を受けたが、いずれも豊富な読書量と透徹した史眼の鋭さとに加うるに、ユニークな史実の解釈には常人の到底及び難いところと、いつも感嘆久しうしたものであった。

藤井さんは又、秀でた歌人でもあられたようでご著書の流麗なご文章もさこそと納得した。例年頂いた年賀ハガキには、いつも九重の野山に咲く可憐な草花の美しい版画が見られた。藤井さんは絵にも優れた腕を持っておられたのだった。その藤井さんから、拙著『火の国

たという旧居前で記念撮影したこと。この近くの現在のお住まいで、いよいよ『和田家文書』や種類の研究に専念される先生が、心身共に《原点》に立っていらっしゃるよう感じたのです。

山門』贈呈に対する礼状が来た。今年一月二十一日付で、珍しくワープロ使用のものだった。

(前略)最近手・指の力がとみに弱くなり、書くのにたいそう手間どりますので、失礼とは存じますがワープロ打ちでお許しくださいませ。

……
ところで私は、ご著書をいただく前には、宇佐国造直系の由の宇佐公康という方の『古伝が語る古代史』(木耳社)という本を読んでいました。一子相伝で来た由のその口伝(書かれたものは今も無いようです)によれば、古代の天皇代はかなり凝縮されそうでした。日向を出た神武は宇佐(ここでウサツヒメと婚する)筑紫に寄ったあと、安芸国で死に、その遺体はウサツヒメとともに宮島の頂上に葬った。

次代は神武のおじの景行天皇が継ぎ、九州を平定した。次は成務で吉備まで勢力をのばし、次は仲哀で神功皇后を妻としたが、妻は武内宿祢と不義密通し、ホムダ王子を生んだ。が、王子は早死にした。やがて宇佐を拠点に、神武とウサツヒメとの間の直系子孫（記紀ではこれがホムダ王子と重ねずにかえられた）が大和に向かい、応神天皇として立つことになった……というわけで、神武―景行―成務―仲哀―応神と五代に収まってしまいます。

記紀に見るその間の他の天皇は、よりずっと早くから大和入りしていた物部と王邇の首長というわけです。《口伝》というので書いたもののような証拠性は無く、当代が恣意的に話しておられるのではないかとの思いもあり、その点にははなはだ頼りないので、もともと古代、歴史は文字でよりは口伝で伝えられてきたかと思うと、荒唐無稽と一概に退けることもできないようです。

ただ神功皇后、武内宿祢に批判的なこと、景行を神武のおじとしていること、宇佐氏の発祥は隠岐国で、祖神はツキヨミノミコト、月中に住むウサギをトートムとして、安芸から九州へと進出した……等の伝承は面白く思いました。彼等は自分たちを北方大陸渡来系としており、対す

る南方からの渡来集団として、阿蘇・熊襲等を目していたようです。そのせい、阿蘇に対しても（神功皇后などと同じく）かなり批判的に伝えてきたようです……。

とりとめもないことを書きました。まだこれからご著作の後半を読む楽しみが控えています。今日はこれで失礼いたします。お元気でお過ごし下さいませ。

「とりとめもないこと」とは書かれていたが、《宇佐氏口伝》の十数行は、大きな夢をふくらませるに足る興味ある話であった。こんなネタを基に、藤井さんが又私の考え及ばぬ意表を突いた、すばらしい作品を発表される日が期待できると、私は楽しかった。

それから程なく、拙著の広告を載せて頂いた「多元的古代・九州ニュース」の三月号が手許に届いた。何気なく眼をやった「事務局だより」

岩宿の報告

びっくりした収穫がありました。差別・いじめ問題のことです。

学歴・納豆売り等によって、相沢氏が学界から差別をされていたことは常識ですが、その地域的なはげし

の片隅に、藤井さんが二月に亡くなられたとの小さな活字に、私はぼやけた老眼をこすりながら、虫眼鏡をすりつけるようにして何度も小文字を確かめた。ほんとうだろうか、疑いもしたが、まぎれもない事実だったことが間もなく判った。

指の自由が利かぬとの、もどかしそうな便りに、相当弱っておられるような感じはしながらも、まさか一月と経たぬ裡に急逝されようとは思ってもよらなかった。

拙著を快く読んで下さった上、《お元気でお越しを》と、老体へのいたわりの言葉を書き送りながら、何でこう早く、と、私は只々夢の世界の中を独り嘆じたのだった。そして藤井さんが、「《宇佐氏口伝》考」とでも題した論考を実現できぬまま逝かれた無念のご心中をしみじみと思いやったのである。

（十月二十一日）

鴨下 武之

さに驚きました。

いままで、学界が旧石器時代を認めなかったのを、明大のS助教授達が一緒に調査をして、相沢氏を世に出したと思っていました。

また、小生は山川出版社の『群馬県の歴史散歩』を必ず携行していますが、この岩宿遺跡のところ相沢氏のことは、一つも出てきません。あれは各県の高校の歴史の教師が集まって作っているもので、なぜ郷土の誇りである相沢氏の名がないのか、不思議でした。

笠懸町の岩宿博物館の説明員のお話では、他所から来る人は「相沢先生」、土地の人は、「納豆を売りながらその辺を掘っている変人」と見ているようです。

相沢忠洋記念館の管理をしている、奥様の八重子さんの涙ながらのお話から、高校の先生達は、「夜間の小学校をようやく卒業したような無学な人間が、考古学のまねごとをするのはけしからぬ」というのが、一般的なムードで、発掘の協力など、まったくしなかったそうです。

明大の発掘の発端は、芹沢長介氏（当時明大講師）が慶応の江坂輝弥氏の家を訪問したとき、相沢氏がいて、江坂氏が席を外したスキに相沢氏が発掘した石器を見せたことから始まるのです。江坂氏は、やはり高校の先生と同じ考えを持っていることを見抜き、相沢氏は持参した発掘品を見せなかったのです。

芹沢氏が相沢氏を説得し、昭和二十四年、明大S助教授・芹沢講師・学

生等と共に、相沢氏と共同で発掘し、ついに日本にも旧石器時代があったことが、一般に発表されたわけですが、翌朝の新聞には、S助教の名前だけが出て、真の発見者である相沢のAの字もでなかったのです。

モース氏の大森貝塚の発見と並ぶ重大な発見の功績を自分一人で独占すべく、その後もしつこく相沢氏の抹殺を図ったのでした。

その点、芹沢氏は嚴重に抗議し、真の発見者は相沢氏であると、機会あるごとに発表し、結局芹沢氏は上長のS氏の下にいられなくなり、東北大学に移り、生涯相沢氏を助けて来たわけです。

現在、相沢忠洋記念館の館長は芹沢氏であり、在野の考古学の功労者に贈られる『相沢賞』の評議委員長もされている。ちなみに第1回の授賞者は東北で旧石器発見名人の藤村新一氏である。

相沢氏はその後、群馬県功労賞、吉川英治賞など受賞され、宇都宮大学講師や第四紀学会会員、歴史編纂委員その他多くのステイタスが与えられるが、奥様が涙ながらに指さす年表で、日本考古学学会員になったのが、昭和四九年（四九才）と、ずっと後である。

この学会は全員の賛成がなければ入会出来ない、のであるが、S氏一

人が反対してなれなかった。という。四十九年はたまたま彼が欠席したために、全員賛成で推薦された、という。

帝京大学の阿部副学長みたいな人間はどここの学界にもいるんだ。小生は差別というものが、一番嫌いで、小生なりに戦ってきた積もりです。自分ではどうにもならない、運命的なことが、一番差別に結び付くのです。

相沢氏については、数奇なその生い立ちから語れば切りがないが、氏の著書『『岩宿』の発見』（講談社文庫）は高校現代国語の教科書にものっているほどの名文であり、その方でじっくり味わって下さい。

記念館には、世界的に有名な染色家の「芹沢圭介」のノレンやハンカチが売っていたが、聞けば、長介氏はその長男だそうである。「芹沢圭介」の記念館が静岡の「登呂遺跡」にあるのは、偶然だろうか。

『出雲王朝』無断使用に抗議する

立川市 福永晋三
サンケイ新聞御中

産経新聞も月々日夕刊の社会面に、「加茂岩倉遺跡と荒神谷遺跡」についての記事が載った。両遺跡は、大

国主命を祭る兵主（ひょうず）神社のある大黒山から、等距離（約一・八キロ）にあることに注目。門脇禎二氏から「荒神谷遺跡は神名火山（仏経山）との関連ばかり重視してきたが、考え直さなければいけないかも知れない」との話を取った。そして、当記事の末尾を「大黒山と二つの遺跡の関係が説明されれば、古代出雲王朝説や出雲大社の起源などにも影響を与えそうだ。」と結んだ。私は、ここの『出雲王朝』の語の使用について、記者（貴社としてもよい）の重大な過失、あるいは悪意に満ちた隠匿を感じるのを禁じ得ないのである。

した。今回、加茂岩倉遺跡の出現に及んで、またも古田氏の名を伏せたまま、『出雲王朝』説を掲げるのは、あまりにも大家に対する迎合が過ぎないか。学界に同調して、記事に客観性や公平を欠いては、新聞社の名折れであろう。不勉強だったら、素直に詫びて欲しい。悪意がないなら、古田氏の名を追記していただきたい。貴社の誠意が見られないなら、二度と貴紙を購読しないまで。

（平成8年1月18日）

読む

『漢書注商』

上海古籍出版社発行。著者の呉恂という人は商人の家に成人し、晩年になってから勉強して史書を読み始めたらしい。漢書の注釈は汗牛充棟であるけれども、著者はそれらの注釈を並べて見せて、その互に真相の周囲をぐるぐる回っているさまを、冷静に眺めさせる。それだけでも、中々面白いのだが、最後に「恂案ずるに……」といって、快刀乱麻で解決案を出して見せる。どうも面白すぎない。嫌いがあるが、どうも手を放せない。印刷も紙も良くなく、痛みやすいのが欠点。A5、一、一元国内価格六六〇円。

生じていた歴史の石神(森田村石神遺跡)

京都市 十口賀達達也

「歴史は足にて知るべきものなり」
秋田孝季によるこの至言を今回ほど痛感したことはなかった。九月十四日より始まった東北・北海道の旅は、数々の発見と感動に満ちた十日間となった。江戸時代、同様の道筋を孝季もたどったであろう。私の場合は文明の利器、鉄道と自動車に頼ったのだが、短期間に広範囲の移動が可能なる反面、多くの見落としと聞き落しがあつたに違いない。それでも数々の学的収穫に恵まれた。

五所川原図書館にて

旅は五所川原市立図書館での調査から始まった。和田家文書を最も早くから調査研究されていた大泉寺の開米智鎧氏が、昭和三十一年から翌年にかけて青森民友新聞に連載した記事の閲覧とコピーが目的だ。

昭和三十一年十一月一日から始まったその連載は「中山修験宗の開祖役行者伝」で、翌年の二月十三日まで六八回を数えている。さらにその翌日から「中山修験宗の開祖文化物語」とタイトルを変えて、これも六月三日まで八十回の連載だ。計百四十八回という大連載の主内

容は、和田家文書に基づく役の行者や金光上人、荒吐神などの伝承の紹介、そして和田父子が山中から発見した文物の調査報告などだ。その連載量からも想像できるように、開米氏は昭和三十一年までに実に多くの和田家文書と和田家集蔵物を見ておられることが、紙面に記されている。



これら開米氏の証言の質と量の前は、偽作説など一瞬たりとも存在不可能。これが同連載を閲覧しての率直な感想だ。

図書館ではもう一つ収穫があつた。昭和五十年発行の『統高橋城物語』、編著者は柳原与四郎氏。こちらも和田家文書(『東日流外三郡誌』も含む)の紹介と、それに基づく高橋城史の研究発表が中心をなしている。柳原氏は和田喜八郎氏など地元の有志とともに高橋城史跡の保護と調査研究をすすめられた人物である。同書にも高橋城関連の和田家文書などの紹介が多数なされているが、

中でも注目すべきこととして、当時、木村実氏(故人)がそれら古文書の書写をされていた事実が記されていることだ。たとえば「殉者火葬記」という高橋城落城のことが記された文書を掲載し、その後に「之は四十二年九月木村家古文書から写しとして木村実氏の書である。続いて木村氏の写し書きがあり討死した人名が一卷の古書に遺されていたという事であった。」と、木村氏が古文書の書写をされていたことが記されている。もちろんそれは「偽作」などとは無縁。コピー器が今ほど普及していなかった当時としては達筆者による書写は当然の行為と言うべきであろう。また、「再建」された高橋城の展示室には、木村実氏よりもたらされた文書が六巻ほど存在している(案内していただいた野宮喜造氏の説明による)。末尾に「和田末吉」という署名が見えるので、これも和田家文書明治写本を戦後に再書写されたものと思われる。

阿吽寺での新証言

翌日、津軽海峡トンネルをくぐり北海道の地へ。私にとって初めての北海道旅行。ここでも望外の収穫に恵まれたのだった。

それは松前町阿吽寺でのこと。和田家文書「祖訓大要」を秋田孝季が

書写したとされる安東一族ゆかりの寺院だ。残念ながら「祖訓大要」については火災のため寺伝も残っていないようで不明のままだったが、案内していただいた地元の歴史研究家永田富智氏より貴重な証言を聞かせていただいた。

永田氏は昭和四六年に市浦村村役場で和田家より届いたばかりの『東日流外三郡誌』二、三百冊をご覧になっており、しかもそれらが紙質や墨・書体などから判断して明治後期のもので戦後は有り得ないと述べられたのである。氏は私とは違い、和田家文書の資料価値をそれほど高くおいておられないようだったが、それは『東日流外三郡誌』に書かれている内容は古い、文書そのものは明治期のものであるという理由からのものである。しかし、氏の証言は和田喜八郎氏戦後偽作説を明確に否定するものだ。

北海道史編纂の実績を持ち、現在も松前町史や福島町史の編纂に携わり、古文書などを熟知されている氏の証言は貴重だ。『東日流外三郡誌』和田喜八郎氏偽作説は根拠を持たぬことがますます明かとなったのである(永田証言はビデオ収録済み)。

森田村石神遺跡の石神

旅行中最大の発見。それは小島英

伸氏（京都市在住、津軽出身）により導かれた。発端は八月二四日、小島氏が初めて拙宅を訪ねられた日のことだ。話がはずむ中、津軽出身の氏より、森田村石神地区の縄文遺跡から隕鉄らしきものが出土しており、実物を触ったが間違いなく金属であったと聞かされたのである。

和田家に隕鉄が伝存しており、それが「天の石神」であること、そして三内丸山遺跡から出土したような六本柱の高層建築物に天地水の石神が祭られていたことを、筆者は古田史学会報十号で紹介し、将来、同様の遺跡から隕石や化石が出土する可能性を示唆したばかりだったので、この情報にいかにも驚いたか想像していただこう。

今回、藤本光幸氏とともに森田村歴史民俗資料館へ赴き、石神を探した。資料館には石神遺跡の出土品が展示されており、それは縄文前期から晩期に至る大規模な遺跡だ。

問題の石神は何の説明もなく並べであった。直径十五釐くらいの丸い白と黒の石が二個、やや卵型のものが二個と、知らない人が見ればただの丸い石としか映らない。あるいは縄文式土器の迫力に圧倒されて見落としてしまいそうな様相でさえあった。しかも発掘報告書には出土事実さえ記されていない。

係の人にたずねると、「内部見解」

は明快だった。「縄文の石神です」と。私たちが和田家文書のことを話すと、興味を持たれたのか、集蔵庫からお菓子の容器に入った別の石神を見せてくれた。それは調査のために割られており、外側は白っぽく石のようだが内部は金属結晶で、キラキラと輝いていて錆びていない。かなりの純度の鉄のようだ。そして、その容器には「石神」と書かれた紙が貼ってある。別の紙片には説明書きがあり、「初代石神。二代三代展示。4代以降は不定形」と記されている。調査のため割ったものが初代で、展示されている黒い石と白い石が二代目と三代目、卵型のものが四代目以降ということらしい。説明では中期末から後期にかけての縄文式土器と一緒に出土しており、縄文時代の信仰の対象であったのは間違いないとのこと。

私が、黒い石神は隕鉄の可能性があるので是非検査してほしい、もし地球上の鉄であれば、その産地が特定できるかも知れないし、縄文時代に鉄球を石神として祭っていたことは宗教史の面からも貴重な発見になることを述べると、それならば調査してみたいと係の方は返答された。

ちなみに、展示されている二個の石神は底がやや削られて、転がらな

いような工夫が施された状態で出土したという。あきらかに平面上に並べるための加工だ。これが縄文の石神で、もし隕鉄であったとすれば、恐るべきは和田家文書だ。縄文時代からの伝承を伝えていたのだから。しかし、これは不思議なことではない。出雲の国引き神話が旧石器縄文の神話であったことを古田先生が既に論証されているし、それを証明する黒曜石の出土分布と産地が今では科学的に証明されている。縄文の宝庫である津軽に縄文神話が伝承されてきたとしても、それは在って当り前とも言えよう。何よりも石神という地名そのものが、縄文以来の「石神」の伝統を受け継いだものであろう。

同遺跡は近々十年計画で発掘が開始されるとのこと。次に出土するものが、あの三内丸山を凌ぐ可能性は充分だ。楽しみにして待ちたい。

石塔山、盛岡、仙台

旅の後半の収穫は、人々との出会いだった。石塔山では青山兼四郎氏や松橋宮司、和田喜八郎氏をはじめ全国からみえられた懐かしい方々と再会を喜び、岩手大学では岡崎正道助教授と「現代」について語り合い、仙台では佐々木広堂さんらと楽しい一夕を過ごした。おりからの台風

もかかわらず、福島県から青田さんらも見えられた。

偽作論者による口汚い中傷が続けば続くほど、真実と私たちの友情は一層光り輝く。学問の殿堂とは、そのような真実を求めて止まぬ人々の真心の中にのみ存在するのである。ラファエロが描いた「アテネの学堂」のソクラテスたちのような。

旧石器時代の木造施設出土展

一万六、七千年前の旧石器の木造施設ではないかとされる炭化加工木が、今年三月出土した。場所は相模野台地の藤沢市用田。同じ台地上には世界最古の土器を出土した大和市があり、同じ文化圏といってよい。旧石器人の成熟度の上に土器の発明があったとする古田先生の説を裏付ける、画期的な、しかし「やはり出てきたか」といった出土物である。

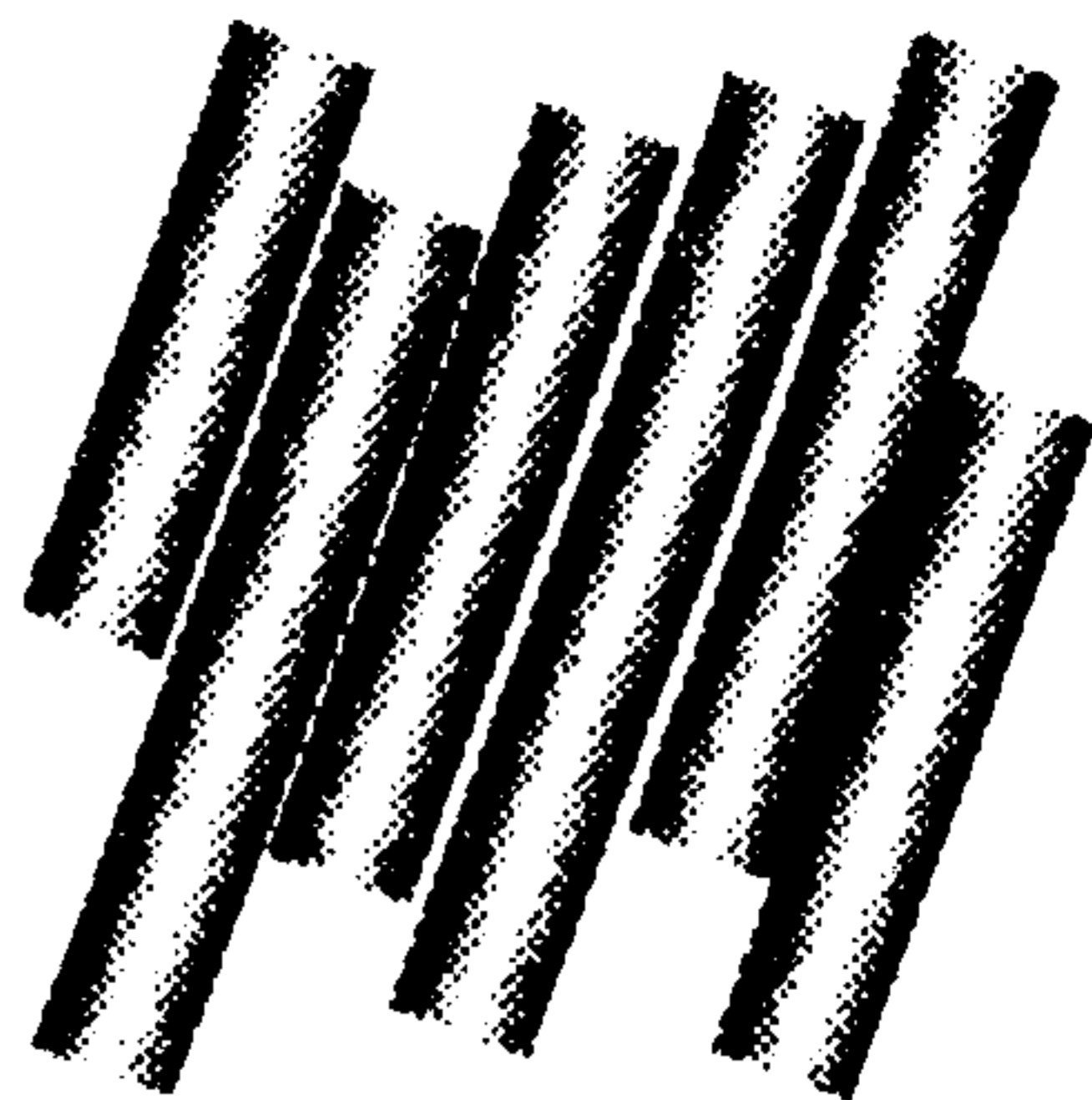
◆今回の出土も含め遺跡調査発表会、出土展が次の日程で開かれる。

◆平成九年二月九日、一時～四時半 藤沢市公民館・小ホール、一年間の遺跡調査発表会

◆平成九年二月一九日～二三日、御所見公民館、平成六年からの出土展。

◆二二日(出)～二三日(回)はスライド。

◆くわしくは☎〇四六六・四八・〇九三六、栗原さん宛「用田のこと」と問い合わせてください。



山田宗睦

日本書紀講座

第二〇回

省略部分は何を物語る？

この講座が二十回目を迎えたと聞いて驚いている。まだ十回目ぐらいの実感しかないからだ。私は書紀を一字一句立ち止まって確かめるといふ方法で進んできた。皆さんの中にはイライラしてくる人がいるかもしれない。しかしこうすることで書紀を勝手な解釈で読んでしまうことに對する歯止めになると信じている。

古代史には材料が少ない。その中で書紀は神代から持統時代までを一貫して書いている唯一の書物である。書紀を読んで歴史像を組み立てる人がほとんどであるが、思いつきで書紀を読んでいる場合が多いように思う。一つ一つ確かめ、押さえて行くことが古代史の真相に迫る方法だと思っている。

さて第七段の第三の一書。アマテラスとスサノヲの争いがテーマであることは同じであるが、後半では追放されたスサノヲが姉に別れを告げに、また高天原へのこのこ帰って行

き、誓ひの話、つまり第六段と同じテーマに戻ってしまうという変な構造になっている。分量は多いが、半分は振り出しに戻るといふ内容である。

ここでもアマテラスは総て「日神」と表現されており、第七段は本文と第一の一書、第二と第三の一書とが別系統の史料であることを物語っている。しかも後者では中臣氏の始祖神の扱いが忌部氏などの始祖神よりも上位になっている、新興勢力である中臣氏の史料であることも明らかである。これはまた古い時代の事情と書紀の書かれた時代の事情とがまざりあっていることにつながる。その所を見極めなければならぬ。一つの例が田圃についての記述である。アマテラスの田圃、スサノヲの田圃といった神代の時代に七世紀の排水装置がでてくるといった具合である。また、両者の田圃がどこにあるのか、ということも考えてみる必要の

ある問題である。アマテラスの田圃が天にあるのは当たり前だが、スサノヲの田圃がそこにあるのはおかしい。ではどこなのか？直ちには判らないが、そういう問題意識を持って読み進む必要があるということである。

第三の一書には「云々」とあって省略されている部分が多い。この省略については書紀の研究史の中に一書論という領域がある。三品彰英氏は有力な説を打ち出した人だが、本文のモチーフと一書の内容を比較することで、第二の一書が最も古く、第三の一書がそれら次ぎ、実は第一の一書が一番新しい、とした。その説を批判したのが一書省略説と呼ばれるもので、一書にはたくさん省略があるから、比較してみても意味がない、というのである。しかし、一書省略説ですべてが説明できるわけでもなく、一書のありかたはもっと複雑である。

第三の一書で注目すべきは諸神（衆神）である。ここでは高天原の意思決定は諸神の協議によって行われる。書紀では天神が登場し、命令する場面があるが、調べてみると「アマテラス」と書かれた場面では天神が登場し、「日神」と表現される箇所では諸神であって天神はいない。これは書紀には二つの違った要

素があることを示す。これに対し古事記はアマテラス表現の史料だけ、つまり一つの要素しか存在しない。第三の一書には古事記にない側面、古事記と共通する側面が共存するという、端倪すべからざるものがある。

このほか中臣氏の始祖として興台産靈（コゴトムスヒ）なる神が登場するの、「台」の字を「と」と読ませるのもここだけである。また、三種の宝器の構成の変化、高天原と根の国の位置関係が従来の水平型から垂直型へ変わっていることも見逃せない。古い九州型の神話から大和型への神話の転換を示すものである。

* * *
アマテラスと日神という区分けがきれいに貫徹されているのは見事である。中臣氏のカゲが感じられる局面がかじられる局面が続いている。

(木村由紀雄・記)

原稿募集

論文、考証、随筆、その他。何でも結構です。自信のあるものは勿論、多少どうか？というものでも結構です。（自分では案外いい所がわからないこともあります）
長すぎるものでも、すぐには掲載できなくとも、いろいろ企画がありますから。ファイト！



定例活動の報告

富永長三



十月月例△云報生口

萩原秀三郎氏講演

今から四半世紀ほど以前、照葉樹林文化論が盛んになった。それとも稲作起源雲南説も行われた。また雲南と日本の民俗の類同から、日本文化の源郷は雲南にあり、と多くの人が雲南を訪れた。萩原氏も何度か雲南、貴州の地を尋ね、写真集も出されている。その後、河姆渡遺跡の発見以降、揚子江中下流域に古い稲作遺跡の発見が相次ぎ、今日では稲作起源は揚子江中下流域とする説が強まっている。氏も早くからこの説を主張してこられたが、今回はこの稲作の伝来を、鳥霊信仰をキーワードとしてお話された。

鳥霊信仰とは、古代、鳥が自由に天空を飛ぶ姿から、神や祖霊、つまり神霊を地上に運ぶ使者と見、鳥をあの世とこの世を結ぶ使者と考えていた。鳥霊信仰は世界各地に見られ、それぞれの地で文化複合をし伝承されているという。萩原氏はこの鳥霊信仰と稲作儀礼との結び付きを重視され、日本列島、朝鮮半島、中国と調査を重ねられてきた。たとえば江戸神輿の上に飾られる

一部だけをお伝えした。

万葉采しと漢文(一〇月)

東歌は前回に引き続き雲の歌が続くところ、

三五二〇 面形の 忘れむ時は 大野ろに 棚引く雲を 見つつ偲はむ

三五二一 わが面の 忘れも時は 筑波嶺を ぶりさけ見つつ 妹は偲はぬ

四四二一 わが行きの 息衝くしかば 足柄の 峰延ほ雲を 見と偲はぬ

前の歌は、茨城郡占部小龍、後の歌は都筑郡上丁服部於田、常陸と武蔵の防人の歌だ。また他の巻々でも

雲はよく歌われている。
二二五 直の逢ひは 逢ひたえざらむ 石川に 雲立ち渡れ 見つつ偲はむ
〔「相不勝」逢ひたえざらむ、古田武彦『人麿の運命』による、通常は、あいかつましじ、と読まれている。〕
四二八 こもりくの 泊瀬の山の 山の際に いざよふ雲は 妹にかあらむ
前の歌は人麿の死にあたり依羅娘子の歌、後者は土形娘子、火葬の時人麿の歌。いずれも雲に死者の面影を見ている。これらの雲を東歌の雲に重ね合わせると、また別の東歌像が見えてくるのではなからうか。
(くわしくは別の機会に、)

漢文は隋書・百濟伝。
「百濟の先は高麗国より出づ。」とはじまり、卵から生まれた東明は、廁溷(かはや)に棄てられるが死せず養われる。しかし「長ずるに及び、高麗王之を忌む。東明懼れ、逃れて淹水に至る、夫餘人共に之を奉ず。東明の後、仇台なるもの有り、仁信に篤く、始めてその国を帯方の故地に立つ。漢の遼東太守公孫度、女を以て之に妻はす。漸以て昌盛、東夷の強国と爲る。初め百家を海に濟すを以て、因りて百濟と号す。」と建

国と国名の由来を記す。次回のところ、左平からはじまる官名なかに、文督、武督と見える。これらは評督、助督とはどんな関係にあるのであるうか。楽しみである。

十一月月例△△報生口

今日は、新泉社社長、小汀良久氏に再販売価格維持制度についてお話を伺った。

再販売価格維持制度とは、本来、メーカーが流通業者に商品を売り渡せば、商品の価格は自由なわけだが、安売りによって、はげしく価格のくずれる恐れがあり、そのことが自由な生産を妨げたり、品質の低下を招いたりし、ひいては消費者の利益を損なうと目される商品については、独禁法の適用除外として、メーカーが最終販売価格を指示することができ、これをいう。書籍も適用除外品目の一つである。このため全国各地でも同じ値段で本を買うことができるところ。ところでこの再販制度をめぐって、出版社と公正取引委員会との間で攻防が繰り返されている。もとより本の値段は安いほうが望ましい。しかし乱売によって、小出版社が淘汰され、少数派の発表の場が閉ざされるのは望ましくない。私たちの会も『新・古代学』の発行にかか

わっている。このほか欲しい本が大都市以外ではなかなか手に入り難い等々、本をめぐる問題は、価格だけでなく流通を含め様々存在する。

今月の例会は、本をめぐる諸問題について、とりわけ多元の会の活動とあいまって考えさせられる例会となった。この後、小汀氏はご自分の姓、小汀が『古事記』『日本書紀』に出てくる、伊那佐之小浜、五十狭狭之小汀、五十田之小汀、によるのでは、からはじまって新泉社にいたる自分史を語られたが、割愛させていただきます。

次には青山富士夫氏の、加茂岩倉遺跡の報告。あいにく現地説明会当日ではなかったために、出土現場には立入らせてもらえなかったが、加茂町教育委員会のプリントを持ち帰られて説明された。この遺跡、また出土した銅鐸についてはテレビ、新聞等でご承知のとおり、地図をみると、加茂岩倉遺跡と荒神谷遺跡が大黒山と高瀬山を結ぶ尾根を挟んで丁度対象的な位置にあること、近くの神原神社古墳のありよう、金原、砂子原等、金属にかかわる地名があること、その他話はずむ。また青山氏が現地を案内していただいた知人に銅鐸出土の感想をうかがうと、「いよいよ難しいことになりました

なあ。」と答えられたそうである。荒神谷遺跡、加茂岩倉遺跡の出現は過去の常識では計り知れない出雲の古代をものがたっている。

さてここ加茂岩倉遺跡のある神原郷は、「天の下造らしし大神の御財を積み置き給ひし處なり。」と『出雲風土記』に記されている、と古田武彦氏は指摘された。またその後新聞でも同様に報道された。だがしかし、それだけでは、何故この地に御財を置いたのかは解けない。ここにもう一つのヒントがある。スサノオがクシイナダ姫と結婚した地を『記・紀』は須賀、清地と記す。そして『出雲風土記』には須我社と大原郡条に見える。オオクニヌシはスサノオの六世の孫。一族創世の地、それが大原郡なのではなからうか。それゆえここに御財を積み置いたのでは、と推定するのだが……

日九当子△△安未内

場所 東京都埋蔵文化センター
日時 九七年一月一二日(日) 一二時
四五分集合、一時から三時まで見学
集合 京王線 小田急線 多摩センター駅改札口前
埋文センターにて 展示品説明、
映画 「縄文の森」上映
縄文庭園散歩、その後移動、田端遺跡の見学の予定

来春の「発表と懇談の会」

講演予定お知らせ
「多元的古代」研究会・九州
常任幹事

灰塚照明氏

博覧強記、古代字地名の研究者として知られる同氏の蘊蓄が期待されます。日時調整中

古田史学研究会
事務局長

古賀達也氏

九八年二月二日(日)
演題 九州年号金石文の再検討
付・和田家文書の伝承力



『海の古代史』訂正版出来

誤植などが多かった初版の訂正されたものが発行されました。はがき通信でお知らせしましたように、原書房より交換されますので、間違いを指摘したハガキを原書房・石原さん宛お送り下さい。訂正版が送られてきます。



なお新しい版の改訂本が会まで送られてきていますので、購入ご希望の方は高田かつ子あてご連絡下さい。

多元の会 カレンダー

記入のない催しの会場は全て文京区民センターです

12月

1日(日) 午後1時 発表と懇談の会
 今回は会員の研究発表を中心に進めます。
 青山富士夫氏「人麿の妻・依羅娘子考」
 木村由紀雄氏「渤海から日本を見る」

22日(日) 午後1時 万葉集と漢文を読む会
 万葉集は巻第十四「東歌」、漢文は「隋書・東夷伝」
 を読み続けます。《既成概念にとらわれずに古典を読もう》をモットーに活発な討論とともに進めています。
 日本書紀講座は12月・1月はお休みです。

1月

12日(日) 東京都埋蔵文化センター見学会
 京王線/小田急線・多摩センター駅12時45分集合
 詳しくは別項ご案内にて
 26日(日) 午後1時 万葉集と漢文を読む会

2月

2日(日) 午後一時 発表と懇談の会
 古賀達也氏講演「九州年号金石文の再検討・付・和田家文書の伝承力」
 9日(日) 午後1時半 山田宗睦氏「日本書紀講座」
 第22回
 23日(日) 午後1時 万葉集と漢文を読む会

●来春は恒例の古田武彦氏の講演会がありませんので、一月二二日(日)、別項およびカレンダーに載せましたように、東京埋蔵文化財センターに見学に参ります。皆さんのお元気に参加されることを期待します。当日は研究員の方のご説明も予約してありますので、通常の見学より得る物が多いと存じます。

●オオヒルメムチ神社調査について
 『多元』一四号で古田氏が呼び掛けられたオオヒルメムチや、ヒルコ大神を祀る神社の調査を、いろいろ

な方が始められています(長井敬二・高木博・日野清子・鴨下武之の各氏ら)。事務局でも神奈川県内の神社から実地調査を始めましたが、いろいろ興味あることがわかって参りました。これから始めようという方がありましたら、ご一報下さい。

●先日海老名市の有鹿神社へ参りました。延喜式内・相模の国十三座の一であり、倭名類聚抄にも有鹿郷が相模の国高座郡の部に記されていて、祭神は有鹿大神とも呼ばれています。が、不思議なことに男神だとの伝承が残っているそうです。そこから相模川沿いに七キロほど溯ると、清水の湧く洞窟があつて、有鹿神社の奥

宮です。こちらの祭神は有鹿比女命といふ女神とのこと、いつころから祭られるようになったかは明確ではありませんが、これらの特徴から推察すると、縄文中期に溯るかと思われる。オオヒルメムチがいつころから祭られるようになったかは不明ですが、非常に古い、日本書紀に書かれた感じよりさらに古いことは間違いないようです。

●あいつく考古学的発掘の成果によつて、(今号の福永氏の論文にあるように、なしくずし且つ古田氏の名前抜きではあります)古田学説を事実上避けて通れぬところまで来ています。皆さん、新聞の発掘記事に

注意して下さい。もし「これは」といふ記事がありましたら、相互に情報を交換し合ひましょう。



◆今号は思いがけず多方面から定期的に先に延ばせない性質の原稿を多数いただきました、今までにない増ページになりました。◆古田先生からは穂高神社の御舟祭りの始終を観察され、くわしく原稿としていただいた。それと前後して、出雲加茂岩倉遺跡の銅鐸について、先生の感触をうかがつて、メモにまとめて送つたところ、丁寧に訂正され、コメントまでつけて戻された。現在ホットな問題でもあり、これもそのまま載せさせていただきます。◆中小路先生の講演要旨も、連載してなお尽くせず、はなはだ粗い要約に終つた。これ以上延ばしても本意でないの、一応完とさせていただく。これについては冊子化の案もあり、そちらに譲ることも可能であろう。◆『多元』はこれ今年最期、会員の皆さんよいお年を。◆編集者への連絡はT232 横浜市南区永田みなみ台2・10・401 安藤哲朗(☎045・742・1446・ファクスも)まで
 (哲朗誠惶誠恐、頓首頓首、謹言)